慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	弔辞 (故鈴木清之輔教授追悼号)
Sub Title	
Author	堀田, 一善(Hotta, Kazuyoshi)
Publisher	
Publication year	2000
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.43, No.特別号 (2000. 11) ,p.iii-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20001100-00687980

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

弔　辞

慶應義塾大学商学部教授鈴木清之輔君の訃報に接し，学部を代表して謹んで哀悼の誠を捧げたいと存じます。

鈴木君は，昭和43年３月慶應義塾大学商学部を卒業後，直ちに，同大学大学院商学研究科修士課程に進学され，学部時代からの指導教授であった現慶應義塾大学名誉教授野口祐先生のもとで，経済社会における資本の集積・集中プロセスならびに企業形態分析にかかわる研究に本格的に取り組まれ，昭和49年３月に同研究科博士課程を修了されました。

この間，昭和46年に商学研究科修士課程を修了されると共に，鈴木君は本塾大学商学部助手に任用され，その後，昭和50年９月より53年10月までの３年間にわたる，当時の西ドイツのベルリン自由大学への留学を間に挟み，帰国後，かの地での研究の成果を集成されて，昭和58年４月に助教授に昇格され，平成５年４月に商学部教授ならびに大学院商学研究科委員に就任されました。

以後，今日に至るまで，鈴木君は商学部および大学院商学研究科において，経営学分野の研究・教育を担う中心メンバーの一人として活躍され，学部や大学院の講義や演習を通じて，またご自身の研究会の指導を通じて，幾多の有為な人材を世に送り出してこられました。また塾内にあっては，学部の各種委員会のメンバーとして活躍されたほか，学生部委員や通信教育部の学生部副部長を歴任されました。中でも昭和60年から平成５年まで，足掛け８年の永きにわたって，大学国際センター副部長を務められ，慶應義塾と海外の諸大学との間の交換協定の実現や，塾生の留学ならびに海外留学生の受け入れに献身的に努力されたことは忘れることができません。

ここにご参集の方々は鈴木君とお近しい方々ばかりであり，よくご存知のことと拝察いたしますが，教育・研究指導に際しての同君の熱情は誠に並々ならぬものがあり，学生諸君に対する深い愛情と青年諸君の可能性に対する厚い信頼に裏打ちされた厳しいものでありました。

私事で恐縮ですが，鈴木君とは研究室が向かい合っている関係もあって，研究分野を異にしてはおりますが，私自身しばしば同君の部屋に入り浸って，様々な問題や論点をめぐって議論する機会を与えてもらいました。こうした議論を通じて啓発され教えられたことは多々ありますが，とりわけ，知識に対する鈴木君の謙虚な姿勢は，印象深いものでありました。フレームワークに囚われず，従って自らの枠組みを他者に強制することなく，常にわれわれ人間を取り巻いている社会的世

界についてのより良き理解に到達することに意欲を示されていましたが，そこには，相手の議論に真剣に耳を傾けて，糾すべきは糾し，容認すべきは，立場を超えて容認する姿勢が徹底しており，相互批判を通じてこそ互いに学び合えるのだという，一貫した強い信念を看取することが出来ました。

知識に立ち向かうに際しての鈴木君のこうした態度は，思うに，同君自身の内なる寛容の精神ばかりでなく，昭和50年秋に始まるベルリン自由大学への留学の折り，冷戦構造下にあった世界の様々な国々からの留学生が集まる学寮での生活を通して培われたものであったと推測されます。彼らとの討論を通じて，恐らく鈴木君は，人間社会の制度のほとんどが，そこに生活する人々によって築き上げられてきた伝統や慣習に基礎を置き，様々な問題とぶつかりながら修正を加えられてきたものであるにも拘わらず，従って，われわれ人間の産物であるにも拘わらず，他面では，人間自体がその制度に拘束されて，制度の囚われ人たることを余儀なくされている事実を，文字通りリアリティを持って感知体得されたことでしょう。こうした経験によって，鈴木君本来の思考様式が一層豊かで柔軟なものに磨き上げられていったものと推測しております。そこで経験された様々な事態そのものに流されることなく，君は常に関連事象をその背後に潜んでいると推測される因果的メカニズムの探求と関連づけて，換言すれば理論的知識に昇華させるべく思索を重ねられたのだと思います。その意味で，君は飽くなき理論の探求者，理論の世界における革新の探求者であったと思います。

こうした幅広い経験と深い思索を背景に持つ君であったからこそ，常に多くの青年が君の周りに集う談論風発の場を築く事が出来たのだと思います。そして，鈴木君が，自らの知的立場も含めて，あらゆる人間知識が原則的に批判可能であり，批判的な討論こそが知識生産の場において不可欠であることをわれわれに教えてくれているように思われます。この教えは，残されたわれわれすべてが，等しく自らの問題として受け止めねばならない貴重な教えでありましょう。

今，こうして鈴木君に最後のお別れの言葉を述べるにあたり，53歳というその余りにも短い生涯に無念の感を禁じ得ませんが，商学部を代表して，君が愛して止まなかった商学部の一層の発展のために，微力ながら力を尽くすことをお約束し，衷心よりご冥福をお祈り申し上げ，お別れの言葉といたします。

平成11年6月18日

商学部長（当時）　堀　田　一　善